

令和 5 年 6 月 6 日現在

機関番号：33303

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K17537

研究課題名（和文）外来通院中のがんサバイバーのスピリチュアリティを支える支援モデルの構築

研究課題名（英文）Construction of support model to the spirituality of cancer survivors in the outpatient

研究代表者

北村 佳子 (KITAMURA, Yoshiko)

金沢医科大学・看護学部・講師

研究者番号：20454233

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、外来通院中のがんサバイバーのスピリチュアリティを支える支援モデルの構築を目指し取り組んだ。「がん看護・スピリチュアルケア研修会」を開催し、参加者自身のスピリチュアリティの気付きから、日々のケア実践を振り返ることができた。また、外来化学療法を受けているがんサバイバーに対し、横断調査を実施し、身体状況、現在の生活の満足度とquality of lifeとの関連する要因を特定した。さらに、看護師の業務負担と日常生活がどのように変化したかを調査し、看護師の離職意思に関連する要因を特定することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

がん看護・スピリチュアルケア研修会に参加した看護師らは、自己の存在とケアの意味を見出すことができ、前向きな姿勢に変化していた。外来化学療法を受けているがんサバイバーのquality of lifeの関連要因に倦怠感が示された。医療者は倦怠感へのケアの必要性が示唆された。COVID-19パンデミックがケアの環境を激変させた。看護師の夜間覚醒とカウンセリング希望が看護師の院内異動の意思を予測する要因であることが示唆された。研究者は院内異動の意思を将来の離職意向を示す要因の一つと考えており、ケアの質を担保するためにも看護師の睡眠パターンやカウンセリング希望を注意深くモニタリングすることを推奨する。

研究成果の概要（英文）：In this study, we aimed to construct a support model for the spirituality of cancer survivors who are treated chemotherapy during outpatients. We held a "Cancer Nursing/Spiritual Care Workshop". Participants were able to become aware of their own spirituality and reflect on their care practices. A cross-sectional survey was conducted among cancer survivors undergoing outpatient chemotherapy to identify factors associated with physical status, current life satisfaction, and quality of life. We investigated the workload of nurses and changes in their daily lives. We investigated the workload of nurses and changes in their daily lives. In this study, we were able to investigate the factors related to Japanese nurses' desire to quit their jobs during the Omicron wave of the coronavirus disease 2019 pandemic.

研究分野：臨床看護学関連

キーワード：がんサバイバー 看護師 外来化学療法 スピリチュアリティ 横断研究

1. 研究開始当初の背景

本研究の目的は、外来通院中のがんサバイバーのスピリチュアリティを支える支援モデルの構築を目指し、外来がん看護に携わる看護師のスピリチュアリティとスピリチュアルケアの関連を明らかにすること、外来通院中のがんサバイバーのスピリチュアリティとスピリチュアルペインの実態を明らかにすること、外来がん看護に携わっている看護師に対し開発した外来通院中のがんサバイバーのスピリチュアリティを支える支援モデルを提供し、実践効果の検証をすること、であった。

がんサバイバーは、がんの診断、告知を受けてから必要な治療の継続中、もしくは終了した現在も定期的な外来受診を継続している。スピリチュアルペインは、人が人生の危機に直面して、存在の枠組み、自己同一性が失われたときに抱える苦痛である。がんサバイバーは、長く続く治療プロセスにおいて繰り返し経験するため、絶え間ない支援が必要とされる。

2020年からのCOVID-19の蔓延により研究フィールドである病院への立ち入り制限、看護師への対面によるインタビューが難しくなるなど研究フィールドの環境が激変した。がんサバイバーや家族へのケアの場である病棟や部門での環境も変化した。がんサバイバーは、感染症暴露の恐怖、心理的苦痛を伴い、看護師は、COVID-19パンデミックによる業務変化、仕事量の変化、COVID-19の自身の感染暴露および不安や恐怖などの心理的負担が明らかであった。看護師の同じ病院内での異動の意思を院内異動の意思と定義した。自発的な離職と非自発的な離職、および病院勤務をやめる意思と看護を完全にやめる意思とを区別することが重要であると考えた。看護師の離職率には院内異動が含まれないため、院内異動は離職の意思とは異なると考えた。また、離職の意思の前に院内異動の意思に介入することで離職防止に貢献できるのではないかと考えた。そこで、研究開始当初の計画であった対面による定量的調査を一旦中止し、可能な限り対面の接触を避けて低負担で安全に調査を行うために、Webベースの調査方法を選択した。

2. 研究の目的

(1) 看護師が自身のスピリチュアリティの気付きから、日々のケア実践を振り返ること。

(2) 看護師の業務負担と日常生活がどのように変化したかを調査し、看護師の離職意思に関連する要因を特定すること。

(3) 外来化学療法を受けているがんサバイバーの身体状況、現在の生活の満足度と quality of life との関連する要因を特定すること。

3. 研究の方法

(1) 「がん看護・スピリチュアルケア研修会」の開催

「看護師のスピリチュアリティとがん看護」をテーマに、平山恵美子先生(藍野大学医療保健学部看護学科・成人看護学・教授、日本スピリチュアルケア学会認定スピリチュアルケア師(専門))に講師依頼し、専門的知識の提供を受けた。対象者は、がん看護に携わる看護師(経験年数は問わない)。研修会開催日時は、2019年10月10日(土)10時20分~15時。プログラムは、10時30分~12時(90分間)において、研修会テーマについて講演を行った。その後、13時~14時(60分間)グループワークを行った。参加者には、事前に、日々の看護実践で印象深く残っている「あなたの看護実践」について、誰かに話すように、日記のように書き留めてきてもらった。グループワークでは、その時、患者さんが言った言葉、参加者が感じたり、考えたりした事柄を語ってもらった。この取り組みには自身の事例を振り返ってもらう目的があった。参加者の応募は、石川県に所在する病院11施設の看護部宛に電話連絡およびチラシを配布し、募った。会場は、金沢医科大学病院を使用した。研究者と講師が何度も会議(オンライン、対面)を設け、研修会の内容を検討、構築した。

(2) 看護師の業務負担と日常生活がどのように変化したかを調査し、看護師の離職意思に関連する要因を特定

新型コロナウイルス感染症患者を受け入れる感染症指定医療機関1施設とその他の医療機関2施設の看護師625名を対象にウェブ横断調査を実施した。感染症指定医療機関とは、感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律(感染症法)に規定された、新型インフルエンザ等の感染症又は新型インフルエンザ等の感染症の患者を受け入れる施設である。調査のために、家族の面会制限による仕事量の変化を評価する匿名の自己報告アンケートを作成した。調査は、クラウドベースの調査開発アプリケーションであるSurveyMonkeyを使用して行われた。2021年11月19日から2022年3月4日まで実施された。

(3) 外来化学療法を受けているがんサバイバーの身体状況、現在の生活の満足度と quality of life との関連する要因を特定

外来化学療法を受けているがんサバイバーに対し、横断調査を実施した。データ収集は、電子カルテと、対象者への聞き取り調査を実施した。聞き取り調査は、研究代表者と研究協力者の2

人で実施した。この調査のためにオリジナルアンケートを作成した。がんサバイバーの身体症状を調査するために一般的な癌や治療に関連した症状を参考に質問項目を作成した。人生の充足感と、今の生活に満足度を調査するために、the Philadelphia Geriatric Center Morale Scale (Lowton, 1975) および肯定的および否定的な感情(Ranzijn & Luszcz, 2000)の調査項目を参考にした。この調査は2022年3月1日から4月6日まで実施された。

4. 研究成果

(1) 「がん看護・スピリチュアルケア研修会」の開催

参加者は4名で、性別は全員女性だった。看護師経験平均年数(SD)は、19.0(13.3)年、range3-35だった。がん看護経験平均年数(SD)は、17.3(12.3)年、range1-30だった。年齢は、20代1人、30代1人、40代1人、50代1人であった。勤務場所は、病棟1人(25%)、外来2人(50%)、その他1人(25%)であった。研修会アンケート結果は、講義テーマの関心について、「非常にもてた」と回答した人が2人(50%)、「かなりもてた」と回答した人が2人(50%)だった。講義内容について、「非常に満足」と回答した人は4人(100%)だった。「講義内容が明日からの看護実践に活かれますか」について「非常に活かせる」と回答した人は4人(100%)だった。グループワークについて、「他の人の意見が聞くことでお互いの悩みや思いを知ることができ、自分はひとりではないということがわかった」、「自分のジレンマを相談することができ、明日から活かしていこうと思った」等の評価が寄せられた。

(2) 看護師の業務負担と日常生活がどのように変化したかを調査し、看護師の離職意思に関連する要因

回答は152人の看護師から得られ、84人が分析対象者であった。院内異動の意思に影響を与える要因は、年齢が30歳以上(OR:6.54、95%CI:1.19-35.83)、11年以上の臨床経験(OR:12.57、95%CI:2.32-68.02)、長時間労働(OR:4.51、95%CI:1.48-13.72)であった。面会制限が看護師の日常生活と院内異動の意思に及ぼす影響は、臨床経験11年以上の看護師(OR:4.31、95%CI:1.09-17.04)、夜間覚醒が多い看護師(OR:3.68、95%CI:1.33-10.18)、カウンセリングを希望した看護師(OR:4.38、95%CI:1.07-17.91)だった。本研究の結果から、看護師の過度の労働時間は、COVID-19パンデミックの間、看護師の院内異動の意思に影響を与える可能性が示唆された。また、看護師の夜間覚醒とカウンセリングを受ける欲求が看護師の院内異動の意思を予測する要因であることが示唆された。

(3) 外来化学療法を受けているがんサバイバーの身体状況、現在の生活の満足度と quality of life との関連する要因

調査対象者は75歳以上がんサバイバー62人だった。そのうち、当日の治療中止が7人、調査協力に同意しないが2人、回答中断の2人を除いた50人(80.6%)を分析対象とした。80%の人が能登地方に居住していた。治療のための直線距離の平均は40.7kmだった。今の生活に満足していないへの関連要因は、全身倦怠感がある(OR:9.614、95%CI:1.280-72.217)、若い時と比べて今の方が幸せでない(OR:10.559、95%CI:1.502-74.237)だった。これらのことから外来がん治療において、75歳以上のがんサバイバーの通院距離を考慮した支援が推奨された。これまでの研究と同様に、倦怠感や75歳以上のがんサバイバーの療養においても生活に影響することが示されたため、医療者は一貫して倦怠感へ注意を向けて支援する必要性が示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 Kitamura Yoshiko, Nakai Hisao, Teranishi Keiko	4. 巻 10
2. 論文標題 Factors Affecting Nurses' Internal Transfer Intentions after the Introduction of COVID-19-Related Family Visiting Restrictions	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Healthcare	6. 最初と最後の頁 959 ~ 959
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3390/healthcare10050959	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Kitamura Yoshiko, Nakai Hisao, Hashimoto Tomoe, Morikawa Yuko, Motoo Yoshiharu	4. 巻 10
2. 論文標題 Correlation between Quality of Life under Treatment and Current Life Satisfaction among Cancer Survivors Aged 75 Years and Older Receiving Outpatient Chemotherapy in Ishikawa Prefecture, Japan	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Healthcare	6. 最初と最後の頁 1863 ~ 1863
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3390/healthcare10101863	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Kitamura Yoshiko, Nakai Hisao, Maekawa Yukie, Yonezawa Hisako, Kitamura Kazuko, Hashimoto Tomoe, Motoo Yoshiharu	4. 巻 11
2. 論文標題 Caregiver Burden among Family Caregivers of Cancer Survivors Aged 75 Years or Older in Japan: A Pilot Study	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Healthcare	6. 最初と最後の頁 473 ~ 473
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3390/healthcare11040473	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Nakai Hisao, Kitamura Yoshiko, Teranishi Keiko	4. 巻 101
2. 論文標題 Factors related to Japanese nurses' desire to quit their jobs during the COVID-19 pandemic: A cross-sectional study	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Medicine	6. 最初と最後の頁 e31197 ~ e31197
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1097/md.00000000000031197	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 北村佳子, 中井寿雄, 寺西敬子
2. 発表標題 COVID-19パンデミックによる家族の面会制限における 看護師の仕事の増減および業務負担と離職意思との関連
3. 学会等名 第42回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	中井 寿雄 (NAKAI Hisao) (10708986)		
研究協力者	寺西 敬子 (TERANISHI Keiko) (10345580)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------